

誕生寺五十八世

智玄院日諦上人について

——人格と信行——

内 藤 潮 洲

(愛知県内頼寺住職)

はじめに

明治維新の廃仏毀釈という大渦巻の中に多くの傑僧が出た。我が宗門にも、いわゆる元政・日臨・日輝・日鑑・日薩・日修の先哲の出現をみた。

そうした中で、山本日諦上人は、幕末から明治中葉にかけて、元政以来の本化の律を体して道念堅固の道を歩んだ、特異な高僧である。しかし、日諦上人の人となりは不明である。

日諦上人は九州八幡の農家の二男として生まれた。母の死が仏縁となつて熱烈なる法華経の信仰に育まれ、途中、法難に会いながら、ついに小湊誕生寺五十八世に晋んだ。北は宮城より関東・山陽・山陰・九州にわたつて二十数カ寺の寺院を創立した。弟子・法孫に依る縁故寺院に至つては五十数カ寺に及んだ。元政の遺風を慕い、その行法は日臨の「屏風のうらうち思想」¹⁾を一代の旗じるしとした。香り高き清風法勲を宗門に残し乍ら、宗門史に語られることの少ない日諦上人は、生前には「今日蓮」と称されて、いささかなりとも世に顕彰しうべき高僧である。

「今日蓮」は、郷土人が誇らしげにつけた名ではない。身延の瀧山で死身修行した日諦上人を知る人達がつけた呼

称である。日諦上人こそは、廃仏毀釈・神道復古の嵐の中で、元政以来の本化律によつて法華經の再興を計らんとした傑僧である。

かつて東洋大学学長の境野黄洋博士は、「本化律最後の高僧と云うよりも、仏教界最後の戒律家ならん。実に元政の後継は本妙、本妙の後継は日諦、日諦の後継はその人を未来に伝うべきのみ」といい、池上本門寺脇田堯惇上人は、「日諦上人は近代宗門の僧風をビツクリサセタ方だ。名譽世慾はなかつた事は、小湊入山、為宗会事件で天下に証明せられた。御経を読み、御題目を多く唱え、持律修行と云うことから、二、三百年の宗門にはない、表裏のない人であつた⁽³⁾」と評している。

また、筆者師父高崎慈海は、望月日謙法主の話として、「明治十四年六百遠忌のとき、薩師は管長、鑑師は法主にし、導師と説教を交互に身延山に於いてつとめ、諦師は小湊より来たる姿は草鞋、天台笠、麻の衣に麻の七条、他の方々は皆紫の衣に緋の七条、而しその諦師の姿の方が余程神々しく見えたのを覚えてゐるし、青年時代に諦師と話した事はないが、神々しい姿を拝して心を引かれたものだ」、「酒井管長は諦師に隨身して笠をかぶり修行したものだ」と述懐している。

さらに、北山本門寺の片山日幹上人の尺牘に、「小衲五才で出家、剃髮の師吉川体全上人より一部経を教えられ、毎晩吉川日鑑上人、山本学静日諦上人等の話を聞くと、何分幼少の時とて何も不明、但一つ覚えてゐることは、日諦上人瀧山修行中非常な御威力の故、蚊も日諦上人には近づかず⁽⁵⁾」等々、日諦上人については枚挙に暇がない。

しかし日諦上人を語るのは、今や房州小湊と、甲州倉ヶ平瀧山の人々である。当時は、九州などでは「日諦上人龍潜寺」といわれた。

日諦上人伝については、「明教新誌」「遠賀郡誌」「八幡市史」に散見され、西島文明著『山本日諦師小伝』、さらに昭和二十九年龍潜寺より発行された「日諦上人伝」などがある。これとても通俗性は免れない。実母の名前すらも記

されておらず、墓碑の遷化月日の誤りなどがある。

上人伝の編纂は、昭和九年十二月七日龍潛寺に於いて、その発願法要がなされたが、これも中断し、また絵伝記の計画もあつたが、何もなされなかつたようである。戦前、鏡忍寺の常岡智光師が、上人伝研究を発願して調査研究をされたが、未完成におわり、その時の資料は不明である。

筆者は学生時代、(一)朝鮮人帰化僧小湊十八代可觀院日延上人の靈跡をたずね、(二)自分の生れた立宣寺の元の所在地を甲府にたずねて、往年の開山以来歴代の奥津城が如何なりいるか、その歴史もしらべたく、(三)法類祖日諦上人の遺蹟をたずねて調査したことがある。

上人、遷化されて八十有余年を迎える。ここに今、少し上人の行跡の一端を記し、上人伝研究の一助としたい。

日諦上人伝を書くに当って、筆者の師父が三十年來記録したもの、日諦上人の弟子大知正敏上人よりお聞きし記述したこと、日諦上人の瀧山時代の弟子の楠木上人よりお聞きしたことや、収集した資料、さらには信者佐野トミ、四糸与吾作、近藤朝広、脇田堯惇と親交のあつた信者から聞いたこと等が基本資料である。今ここに、日諦上人の研究の一端を披瀝するは、日諦上人ならびに師父高崎日尊上人のご恩に謝するものである。

日諦の人格

「今日蓮」、これが現在に至る迄、日諦上人(以下日諦と略称す)に対する尊号である。日諦死後既に八十有余年になるが、日諦の法孫・法曾孫や信徒の子孫による逸話の伝承は、今だに至るところで語り継がれている。

開山寺の龍潛寺に於いても、通称「日諦さん」と云つて、寺名は云わない位である。他宗門の者でも、郷土人は履物の上に手をつけて土下座をして迎えた者が多々あつたという。日諦は、「本門の大律師」⁽⁶⁾、「生仏に異ならず」⁽⁷⁾、「世に道徳の聞へ高き小湊日諦教正」⁽⁸⁾、「終いに今日蓮の栄誉をも得たる人」⁽⁹⁾、「再生日蓮」⁽¹⁰⁾、「再生菩薩」⁽¹¹⁾、「今日蓮」⁽¹²⁾等と称せられ、

宗内のみならず宗外一般にも知られるところであった。

日薩は日諦を評して、「字静師は謹嚴だ。御守り札を作り乃至は御宝前の莊嚴を司つて見直すに及ばぬ」と語った。文久三年、日諦は二十二才の時に鶏溪精舎を辞して持律堅固の大車院日軌に従つた。これは、余りの嚴肅な人格の故に、日薩の心使いであつたらしい。また日薩の師大車院が持律家であつたからで、それにより日薩と日諦は法兄弟の契を結んだ。

瀧山時代の日諦は、常に読經・唱題にふけり、四条庄右衛門は遂に偽僧にあらざることを知つたという。その有様は、倉ヶ平の住人を驚嘆させた。後日、「日諦は唱題鍊成の近代の祖である」と評された。生活のしぐさはまさに良寛の如き風格さえあつたと伝える。そうした日諦を、四条与吾作は、日諦のために宿泊の部屋を作つてもてなしたほどであつた。身延の周辺で、「今日蓮」と称せられるようになったのは、瀧山山籠四年後、日諦二十九才の時であつた。

その後、小湊誕生寺住職特選となり、祝として心性院日遠の二十五条袈裟が身延山から贈られている。小湊では、「山規を改良し、堂塔を修築し、就中、同山の基礎を開ける等、連れ僧侶の自分を尽したる事は、實際に徴して明確なり。看よ看よ、土人は今に師を尊ぶと宗祖の如く師を慕ふこと、赤子の慈母に於けるが如くなる」(「日宗新報」と評されていた。その後、「本山住職を捐つること、弊履を棄つるが如くして高蹈隱退せしものなり」と誕生寺を退いた。その態度は、本化律の僧道と云われるものであろう。

この日諦の恬淡寡欲は、明治二十三年二月十九日に池上本門寺住職特選の時も、同窓の久保田日龜と争うを望まず、これを固辞して受けず、その勇退の志こそ、宗門人の賞讃とするに足ることであつた。池上本門寺住職特選任命取消の使者として、宗務院より久保田日遥を九州の龍潛寺に派遣し、該件取消の旨を聞くや、日諦は容貌自若として、「本門寺に行たと云ふも因縁、龍潛寺に止ると云ふも因縁、総て是れ因縁に任せたる身なれば、進退動静元より心を動かすべき事にあらず。故に予に於ては一場の夢の如く毫も意に介せざるものなれば、当局諸氏に於て決して彼是と心配

し賜わざる様復命ありたし」と云った。この経緯の報告は久保田日遙から三村日修に知らされ、日修から日遙宛の書状に、

極々迷惑なる季節に遠路被罷越御太勞至極。一昨日奥津よりの端書によれば、山本日諦に於ても毫も不満の色なく快々然回答書も被差越候由真に致安心候。嗚々御疲勞察入候。

五月十一日

久保田僧都殿

とある。これ等、日諦の池上本門寺住職特選取消に及んだ態度について、「日宗新報」は、「宏量海の如く磊落不羈の方なれば、是等のこと之より齒牙にかけ賜うへきにあらずとは、記者も想像せし處なるが、心淵の潔白は更に一層の光采を放つて灼々たり」と記している。

この池上事件後は、終生龍潛寺に滞在し寺を離れることはなかった。父母の命日には、弟子を連れて墓參、半日読經し、秋などは堤灯をもって農作業の手伝等をしていた。また母方である上野兼秀の家に日諦の手紙がないのは、近くに病家あれば、求められるままに、ちぎりにて御符にして飲ましたからだという。

明治三十四年、弟子及び信徒によって、『還曆祝詞集』が出版された。日諦の人物に関するところを紹介すると、

廿一年偶我宗有為宗同盟之事也。大有所感爾來拋世事而庵居一室朝誦經夕入三昧烟霞之友風月之娛更無余事矣。嗚呼上人始自隱栖峽陽春秋幾衰葛苦節堅操未以改山林之操宣哉。人呼再生日蓮矣。

ちなみに、日諦の書体について云えば、師の文字ほど、年代的に書体の相違のはつきりしている人も少ない。ことに、瀧山時代の日諦の文字は、苦修練行そのままの侵し難き尖光が感じられる。

日諦の学問

日諦が、充治園に学び、更に歩を進めて鶏溪精舎に研鑽し、甲州瀧山での修行を前に、清澄奥之院豆原祖師堂で誓願したのは、他ならぬ僧風が頽廃したからであった。

日諦の一貫した思想は、一つに宗門の行儀覚醒、二には孝道であった。このため元政を慕い、行法は日臨に学んだのは自然の成り行きである。殊に、日常の清規に至っては、「草山清規」に負うところが大きい。

法衣は絹布毛織物を使用しなかつた。これについては、龍潜寺より出された『日諦伝』に詳しい。即ち、「法衣は略装がキャラコか若しくは麻の十六膝の本衣で、正装は越後縮の褌袷裾で、色はいずれも鼠である。袈裟は、外出途上又は屋内常時は麻の木欄色の五条で、法要は悉く茶の七条であった。特別法要は、越後縮の濃茶色の二十五条いづれも元政流の環掛けて紐結びは全然見られぬ。所持の二十五条の内でも最も大切にされた焦茶色の古色を帯びたものがあつた。それは心性遠師の御着用の遺物であつた。着物は真岡木綿若しくはキャラコ、夏は麻で帯は白の小倉織の角帯、その数も至つて僅少で簡素の極みである。この内肌に着く襦袢・足袋等はことごとく自ら洗濯して人手を煩わすことはなかつた。夜具は白木綿、蚊張は白麻であつた」と記述されている。

小湊時代も、色衣は使用せず、旅行姿は天台笠・錫杖・清浄衣・草鞋という出で立ちであつた。この時、二人の弟子を失い、たとえば孝木日到的の病氣の時などは危篤であつても、五時には女人を下山させている。法要時の散華は、密の葉や日蓮聖人の蘇生の本尊を縮刷したものを用いていた。これは亡き母を思つて使用したのであろうか。

明治二十一年、日薩が病床につくや、日諦は九州より上京し、最後の報恩のため看護をつくした。これについて西島文明は、「二十一年秋に薩上の病を池上に示すや、其恩義を併せ荷ふの故を以て千里報を聞て起ち、昼夜兼行して東上し、其湯薬に侍して看護至らざるなし」と記している。

日薩が滅して、日諦は、七日毎に法華懺法を行っている。特に尽七日忌の法会には、日薩の遺品木欄色越後縮の褌袷裾に、同色同地質の二十五条を着用した。この時、使用された懺法塔は日諦十年間の修行成満祝いに日薩より送られたものであった。

その後、為宗会と同盟会の対立する中、池上本門寺住職特選を固辞するも、管長三村日修や久保田日遥等の懇請によつて、やむなく受諾するが、池上側の反対に会い断念するに至る。恐らく、受・不受の事件から教訓として学んだ日諦の「屏風の裏打ち」的な考えではなかつたろうか。『還曆實誌』には、「二十一年偶我宗有為宗同盟之事也。大有所感爾来抛世事而庵居一室朝誦經夕入三昧烟霞之友風月之娛更無余事矣。」と記されている。池上特選を辞退した日諦の決断は、賢明な選択であつたと思われる。

ところで、日諦の読した日蓮聖人遺文は、『報恩抄』『如説修行抄』『聖愚問答抄』『清正公御書』等であり、『如来秘蔵録』『草山要路』『草山清規』『仏教要義』等を座右の書としていた。

日諦は次のような詩を詠んでいる。

千岳万峯春色鮮 于時採蕨養績年

世人樂歡景公富 吾慕首陽山下賢

これは、瀧山時代の詩であるが、内容よりして、不受僧が、我が門流は周の粟を食はず、寧ろ首陽山に飢うるに如かじと、いつて自害したり無宿者となつて徳川の法綱を免れた心境を日諦も遵守する覚悟の詩であろう。明治五年の戸籍法によつて、僧侶に苗字を名乗らしめたことは、不受不施事件と同じように死をもつて如法の戒律を守る日諦には、堪え難いことであつた筈である。

大体、僧侶と尼僧は「出家」であつて、その文字の示す如く家を出たものである。従つてそこに苗字即ち姓氏なるものあるべき筈はないのである。日蓮聖人は、出家以前には貫名氏又は三国氏の一人であつたが、出家した以上は

貫名氏又は三國氏の日蓮ではない。釋日蓮か沙門日蓮である。

日諦が山梨県権令藤村紫朗に、「嗚呼遁世無籍の罪かかる所なし。願はくは国政の仁恵を以て山僧等の僧道に相叶い候様、御処置降され候はば、縦令身命に相及び候とも本懐の至りに奉存候。蓋し身命は軽く仏制は重き故也」といつて、獄舎に拘禁され、笞刑に会うも、元より覚悟の上であった。

後に、日諦は、「日諦は国に楯突いたのでも県令に反対するのでもない。私の心で政治をすることを悟らせたのだ。それでこの法滅尽の時に坊さんに目を醒させることが出来るかもしれん。官を恨まず、僧の自業自得です。而し官吏の誤りは毒鼓の縁を結ぶことも、それこそ法難として受けてよい」と語った。日諦は折伏に出たのである。

明治六年、日諦は、瀧山修行中、まだ念仏信仰者であった両親に本尊並びに法華經を授与し入信を促している。実父の法華入信の時期は定かではないが、「信徒一同之隨喜も愈増進候由は乍陰法喜仕候。就ては尊父初信徒の者より別紙目録の通香糧御恵投忝受納候御序に可然御通声可被下候」という、日薩より日諦宛の書状から、明治七年前後ではあるまいか。

日諦の学問を要約すれば、『草山集』を身に読んだということが云えないだろうか。特に、日諦晩年の池上事件や為宗同盟論争を契機に、その渦中に入ることなく一途に元政の行規を守り、日臨の「屏風の裏打ち」的な態度は、それを物語るものである。この影響はまた、本尊染筆にも現われ、明治二十年三月八日の曼荼羅には、「草山元政日燈上人」と記入されている。

日諦の信行

龍潜寺の三門に、「諸悪莫作、諸善奉行」の石碑が建立されているが、これこそ日諦の一代の信行、生涯を貫いた修行であった。

「諸悪莫作」即ち止持戒であり、日諦はこれを常行と別行に分け、更に別行を精進行と別行に分けて修行した。精進行は瀧山及び荒谷にかけての十年間であり、この間に別行を時々行っている。常行は生涯中断することはなかった。「諸善奉行」即ち作持戒であり、これは常行・別行の区別なく終生であった。

日諦は、瀧山を追われて故郷に向う途中、玉沢の境政院日暉に親炙しんしやくするが、日暉は、「師が持戒行縛に陥るを免がれずと、因て本尊を写し諸法従本来の句を書して之に與えて云く此利刀を以て彼の戒縛を解け」と云ったところ、日諦は、「大に感悟し之より大に有縁の徒を教化す」と記しとどめている。しかし、日諦の戒は所謂戒縛ではなかった。確かに、始めは信を守る方便としての修行であったが、後には信より出でたる戒にして信行であった。この信行こそは、長題目(唱題修行)より出でたる戒であった。戒縛にあらざ故に日暉と意見が異なり、戒を離れず故に、終に日暉の本尊は拝しなかつたのである。

ところで、日諦の唱題は、「南無妙法」で一区切りし、次に「蓮華經」と唱える長題目であった。読經の時は木魚を用いて、木鉦を使用しなかつたのは、草山の儀式によるものであった。

このように、日諦の信行は、元政・日臨の跡を継いでいるが、更には、釈尊の成立以前の修行を現代に意味もたせて、普賢經の実行者としての自覚から生みだされたものであったといつてもよいのではなからうか。これは、瀧山の特別行が勸発品の中の二十一日、普賢經の四十九日、そして昼夜六時の懺法会等を参考に修行していることから明らかである。

日諦の弟子

日諦の弟子は、八十名を越えるといわれている。現在、門下法縁寺院は五十数カ寺あり、「諦師法縁」として存続している。

数多くある弟子の中で、諸門の十上座として、日道は行儀第一、日普は智信と門長第一、日秀は学解説法第一、日唱は声明文筆第一、日見は護法第一といわれている。日見は、自分の財産を全て龍潜寺に寄進して維持復興に大いに寄与している。又、日普は、食事の時に御膳のすみに皿を置いて十粒程の御飯をもり、二カ所御初穂を並べたという。これは、父母と共に食べたということであつて、師日諦の孝養の影響によつたといわれている。

晩年、日諦は多くの弟子がいたが、「弟子が多すぎると思うかしらんが、魚の子は多けれども魚となるは少ない」と語つたという。事実、日諦自身、苦行の相続は求め難しと思われたれども、妻帯・酒・タバコ・肉食は最後迄許さなかつた。しかし、それを守つたものは、修行中倒れた弟子を除いては、日道・吉沢日祥ほか数人であつた。

弟子の森日元は、故郷の宮城県に、長光寺を創立し、開山に日諦を迎え、また教育普及のため学校を設立している。これについて「日宗新報」は、「宮城県下登米郡長光寺住職森日元師は、元來扶宗家にて、かつて同地方の曹洞宗のみを以て圍繞せられ、本宗寺院のなきを憂へて、同地の熱信者たりし森栄三郎氏と同心戮力して梵刹建立に着手せり。栄三郎氏は業を竣へずして不幸にも泉客となりしも、未亡人は良人の遺志を繼いで日元師を翼け、遂に今の長光寺を建立せられし。趣なるか日元師は更に学校設立の志を起し、昨廿二年、学校を組織し且つ自らも哲学教授を担任し、外土着の良教師を聘して頻に教育普及に憤励し居らるる」と記している。

日諦の信徒

日諦の本格的な伝道は、明治九年十二月八日の苦修練行成満以後であるが、既に瀧山時代に熱烈な信者は相当数に上つた。特に井出村は、自宗のみならず他宗徒も含め全村挙げて帰依するに至つた。

瀧山での最初の信者は、日諦を身延山三光堂より倉ヶ平の瀧山に案内した、四条庄右衛門・同文右衛門・同幸八の三人であつた。しかし彼らは最初から日諦に帰依したわけではない。素姓すら判らない一修行僧に対して、始めは半

信半疑であったが、昼夜常に唱題と水行する姿をみて、遂に帰依するに至った人達である。

このようにして帰依する者が多くなり、それは倉ヶ平から寄畑・井出村へと広がり、従来の堂宇では狭く、明治四年、山を切り開いて堂宇・居間・学問所三棟を完成、ここで毎月八日に礼法華を行っている。しかし、それでも堂宇は狭く、外に筵を敷き詰めた位であった。現在でも、当時の信者の孫や曾孫によって語り継がれ、守り継がれて追慕する者があるが、日諦の教化が熱烈であったことが想像される。

その後、日諦は戸籍法による俗籍に入ることを拒否し、ついに故国前田村に強制送還されていくが、渴仰の念は消ゆることなく、瀧山の信徒達は日諦を木像にして安置するようになった。瀧山の日諦の木像は、誕生寺の宗祖像を塗り替えた仏師奥村雲開の作で、鼠色麻の衣に木欄色の七条をつけている。²⁰

また、日諦滅後は分骨を安置し、瀧山に墓碑を建立し、現在、村人によって二十二日の命日(旧暦)には、偲ばれており、信慕の念は脈々として継続されている。なお、日諦の分骨安置は、明治三十八年八月の遺弟藤巻日道の納骨表によれば、日道によって配慮されたようである。

ところで九州における日諦の活動は、送還後直ちに学舎をおこしている。瀧山からは藤巻日道・佐野慈海の他、四条文右衛門の子も出家し、字を慈貞と称し、墓も龍潜寺にある。又、外護の弟子となった佐野正憲トミ夫妻は、日諦の後を九州まで追って来、日諦の別行に一度奉仕して帰郷している。その時、日諦は佐野夫妻に、「私に会いたい時は、瀧山に行つて御題目を唱えよ。私は座とるぞ」と慰めた。

この佐野夫妻については、明治十七年の「妙法新誌」に次のような紹介記事がある。

爰に有りがたき信男信女とも謂うべき山梨県下西八代郡栄村の佐野正憲夫婦にて、正憲は十八九才の頃より戸長を務め居りしが二十才の時、日諦上人瀧山御籠居の砌屢上人を訊ひ奉り親く教誡を蒙り、爾来怠慢なく妙行を修し、朝夕の勤行は勿論或時は終日妙経を転読し、或時は終夜御妙判に眼をさらし、惟た清浄の行をなすのみを我

楽みとなし、上人に親炙し進らすること、凡そ七年なり。然るに其妻何某も、亦夫に劣らざる質直の者にして常に夫の教誡を守り、諸俱に朝夕妙経の読誦をもち居り往ては二人供出家にならん心懸なるよしなれども、未だ時至らざると見え、優婆塞優婆夷と呼ばれて心の望も遂げずうち暮しけるが、此程日諦上人西海に於て宗学所を建立遊ばされしと聞き、伊呂波教訓といへる者を作り同上人に奉りし。

明治十年十二月八日付の記録によれば、「連月説教日信徒有志喜捨米奉納者」として二百十人の人数が既に参集し、龍潜寺復興後は、百五十戸位の檀家が龍潜寺数十人の生活を維持世話していたという。この頃になると、日諦に帰依する者多く、県下は言うに及ばず、山口・広島・大分方面まで教線は拡大し、「九州と云えば日諦、日諦と云えば龍潜寺」と云われる程、盛況を呈すほどになっていった。

もとより日諦一代の思想の背景には、本妙日臨の「屏風の裏打ち」的な態度が主眼としてある。然るに日薩に対し、充治園以来恩師同様の間柄であり、また鶏溪精舎でも学んでおり、日薩の小湊誕生寺住職の要請は固辞できなかったようである。時に日薩は、明治八年の本山会議に於いて、人材登用主義を採用し、法縁・法臘・年令の如何に拘泥しないことを決議し、法類閥を打破したのであった。ここに於いて、日薩は日諦を小湊特選に推挙するも、日諦は固辞したのであったが、宗運の挽回に係る重大時に、止むなく日諦は小湊誕生寺住職の特選を受諾したのである。日薩は、

何に致し諸本山釐正の首に候得は大に宗風作振の大基礎とも相成候事故万障御差操合是飛御住職被下度左すれば後進輩の策励にも相成且つ信徒の輩も一段隨喜相増し宗門の一美事与相心得候故遅疑なく御飛錫願上候と、再三誕生寺入寺を促している。

小湊時代の日諦は、房州はもとより関東一帯に法雨を降らし、渴仰の信徒は増すばかりであった。現在でも、小湊・小松原では、日諦の法勲行跡を追慕し語り草となっているほどである。事実、日諦の本尊が相当数現存する。

晩年に、『日諦上人還曆祝詞集』という本が出版されているが、誕生寺を退山して二十年近くなっているにも拘らず、小湊地方の信徒の祝詞も記載されている。

房州小湊 静蝶

法の道ふみあきらめて位山

高き齢をしむる君かな

限りなき齢もへなんくる珠数の

玉を千とせの数とりにして

はるかなる六十路の坂を今日越て

のほるも喜し驚の山道

等あり、化導大いに振っている。

この時代の布教の様子について、「明教新誌」に、

房州平郡加知山村日蓮宗妙典寺住職藤輪前厚氏は同国同宗寺院に説教を勤むる寺生まれなるを歎き、取締誕生寺山本日諦氏へ一書を呈し、各寺毎月兩三度つゝは必らず説教を勤めしめ且つ取締の臨時派出ありて伴侶其他の邪正勉不を点検せらるる様いたしたき旨を建言せられたる。

と記されている。

ところで、龍潜寺に、明治二十二年九月に建立された、日諦の宝塔がある。これは、相州小田原の細谷キクという信者により建立されたものである。脇書によれば、「明治十六年余自小湊退蔵於当寺之時相州小田原細谷喜久逆修深信院妙受日成信女寄附之於筑前前田龍潜寺常什開山日諦記之二世日道代」とあって、彼女が篤信者であったことが窺われる。

いずれにしても、日諦の本尊が五千幅以上あったということは、相当な数に当る信者がいたという目安にはなる。

日諦の本尊

日諦の本尊に関しては、かつて半紙百枚位の帳面が三冊、「日諦本尊授与帳」として保存されていたが、現存しない。正確な数字は判らないが、実際は五千幅以上であったと云われている。現在でも、九州方面及び山口県・広島県、千葉県内では誕生寺・鏡忍寺周辺には、日諦の本尊を保持する信者が多数いる。又、山梨県内船地域では、一軒の家に数幅あるところも多くあつて、八月の盂蘭盆に仏間に掛けて奉拝しているほどである。日諦は本尊を書く時は、上質の和紙を使用した。

日諦の本尊は、最初から曼荼羅ではなく、瀧山では初め座像の釈迦仏供養から出発し、しだいに立像釈尊像に替つていった。その他、三宝あり、一字一石あり、曼荼羅では一遍首題あり、十界曼荼羅がある。

福岡県八幡の寿量寺什宝である日諦の本尊は、明治二十年三月八日にしたためられたものであるが、「南無草山日政日燈上人」と書かれており、これは、元政の本化律を生涯の目標とし、実践したということの表われであろうと思われる。

日諦の語録

○皆父母に別れを告げて来たのだから生命いのちがけて修行せよ。

○学問して教への高い立場なのに感心してはつまらぬ。全身に行つて有難さに感謝する様にならねばいけぬ。

○官を恨まず、僧の自業自得です。而し官吏のあやまりは毒鼓の縁をむすぶことも、それこそ法難として受けてよい。

○一つたたかれたら、それだけ懺悔になるのだ。
○悪人でも、生きものを踏むと云う事はいけぬ。たとえ弥陀でも踏むと云う事は法界にすまぬ。

山本日諦の創立寺院と縁故寺院

- ① 瀧山寺 山梨県南部町内船倉ケ平。日蓮宗名簿になく、現在は村人で管理維持する。
- ② 龍潜寺 福岡県北九州市八幡東区祇園原町
- ③ 長光寺 宮城県登米郡中田町石森字霜降館
- ④ 光明寺 宮城県栗原郡若柳町字上畑岡大立
- ⑤ 宝塔寺 福岡県北九州市八幡東区枝光
- ⑥ 寿量寺 福岡県北九州市八幡西区市瀬
- ⑦ 正賢寺 福岡県北九州市八幡西区折尾
- ⑧ 寂光寺 福岡県北九州市戸畑区沢見
- ⑨ 一乗寺 福岡県北九州市戸畑区己中原東
- ⑩ 立宣寺 福岡県北九州市若松区大井戸町
- ⑪ 妙経寺 福岡県宗像市日の里
- ⑫ 大雄寺 北九州市門司区庄司町
- ⑬ 護国寺 山口県下関市上田中町
- ⑭ 蓮成寺 山口県下関市王喜町松屋
- ⑮ 瑞相寺 山口県嘉川原

⑯常在寺 山口県美禰郡秋芳町大字岩永本郷

⑰経王寺 山口県美禰郡秋芳町大字嘉万上郷

⑱報国寺 千葉県勝浦市大森。日諦の附弟鈴木珠成の創立。

⑲妙徳寺 山口県厚狭郡山陽町野中。高足日慈により再興する。

⑳本照寺 山口県下関市小月町京泊。開山は日諦弟子善濟院日成、開基法孫川口慈忍。

㉑妙蓮寺 山口県厚狭郡埴生町。法孫川口妙道尼の創立。

㉒本興寺 山口県宇部市西本町。開基檀越篤信石井マシ女。池上本門寺塔頭坂本院を寺号移転、

日諦徒弟竹若観峰により、本興寺寺号公称。

㉓円満寺 山口県宇部市明治町。もと吉敷郡宮野村に存在し、日諦法孫松下智祥により移転、寺

号公称。

なお、この他に三十数カ寺の縁故寺院があり、開山寺院を入れると全部で五十数カ寺に及ぶ。「妙法新誌」(明治十六年二月三日)には、浄泉寺・広濟寺寺号公称出願中とあるが、この内、浄泉寺は千葉市中西町と思われる。広濟寺に關しては、熊本県菊地郡にあるが、明治十三年創立、開山日轟と記すのみで、正確なことは不明である。

(注)

(1) 本妙日臨律師全集二五八頁

(2) 筆者師父高崎慈海記録ノート

(3) 右同

(4) 右同

(5) 筆者所有の手紙より抜粋

- (6) 「妙法新誌」明治一六年六月一三日
- (7) 「妙法新誌」明治一七年五月二三日
- (8) 「妙法新誌」明治一六年二月三日
- (9) 「日宗新報」
- (10) 『還曆祝詞集』
- (11) 右同
- (12) 右同
- (13) 龍潛寺発行『日諦上人伝』
- (14) 「明教新誌」二六九三号
- (15) 日尊資料
- (16) 「日宗新報」
- (17) 『久保田日遙伝』
- (18) 日尊資料
- (19) 『日諦上人伝』
- (20) 日尊資料
- (21) 『日諦上人伝』
- (22) 龍潛寺蔵
- (23) 日尊資料
- (24) 右同